The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	パスカルの「アポロジー」と「心情」
Author(s)	永瀬, 春男
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1977, 10, p. 19-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47726
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

パスカルの「アポロジー」と「心情」

仏文　永　瀬　春　男

I

パスカルが「パンセ」と呼び慣わされている断想群を書き遺したのは、同時代の不信仰者の前にキリスト教を弁証し、彼らを信仰へと導くためであった。この「キリスト教護教論」（アポロジー）は完成を見ずに終わったが、パスカルの構想がどのようなものであったかは、彼自身の手で表題を付して配列された二十七の綴り（各主題のもとに関連断章を分類し綴じたもの）によって、あらまし知ることができる。このうち最初に置かれ、著作全体の構成に対する著者の配慮を示しているのが、第1章 *Ordre* である。とりわけ断章L.6は、パスカルの企図を簡潔に示している。それによれば「アポロジー」は、第一部で「神なき人間の悲惨」（Misère de l'homme sans Dieu.）あるいは「本性が腐敗していること」（Que la nature est corrompue.）を「本性そのものによって」示し、第二部で「神とともにある人間の至福」（Félicité de l'homme avec Dieu.）あるいは「救済者が存在すること」（Qu'il y a un Réparateur.）を「聖書によって」示すことを目的としている。残された二十七章の展開は、この企図に合致している。

第1章 *Ordre* は、同時にまた「アポロジー」に於て試みられる「論証」がいかなる性格のものであるかについても示唆を与えてくれる。L.5, L.7, L.11 などがそれであるが、これらの断章は信仰の手段について述べたL.808 と密接に関係しているので、まずこちらの断章から目を通してみたい。

(i) Il y a trois moyens de croire: la raison, la coutume, (l') in-

spiration. (ii) La religion chrétienne qui seule a la raison n'admet point pour ses vrais enfants ceux qui croient sans inspiration. (iii) Ce n'est pas qu'elle exclue la raison et la coutume, au contraire; mais il faut ouvrir son esprit aux preuves, s'y confirmer par la coutume, mais s'offrir par les humiliations aux inspirations, qui seules peuvent faire le vrai et salutaire effet, *ne evacuetur crux Chirsti.* (i～iii の番号は引用者による。)

(i) では信仰には三つの手段（理性・習慣・霊感）のあることが述べられ、(ii) ではこのうち霊感によるもののみが真の信仰とされる。(iii) では理性と習慣にも一定の役割が認められるが、それは補助的なものにすぎない。

(ii) の立場は L.7 では

La foi est différente de la preuve. L'une est humaine et l'autre est un don de Dieu.

と表現される。「証拠」(preuve) とは「アポロジー」の提示しうるそれと考えればよく、従ってこのように信仰と証拠の断絶を強調することは、「アポロジー」の意味を失わせることになりかねない。そこに L.5 に於て不信仰者が、神を求めることを促すアポロジストに向かって、「この宗教そのものが、そんな仕方で信じても何もならないというからには、求めようとは思わない」と抗弁する理由がある。

これに対するアポロジストの解答は、当然(iii)の立場からなされねばならない。まず証拠の効用 (utilité des preuves) について、上に引いた L.7 の文に続けて次のように言われる。

... C'est de cette foi que Dieu lui-même met dans le cœur, dont la preuve est souvent l'instrument...

証拠は真の信仰を得させることはできないが，その「道具」として役立ちうる。この故に L. 808 で《il faut ouvrir son esprit aux preuves》と言われるのである。

もうひとつの答えは《Machine》である。「機械」とはL.808 の《il

faut s'y confirmer par la coutume》 に対応し、身体の自動機械（automate）を習慣によって傾かせることを意味する（精神に劣らぬこの「機械」の力についてはL.821を参照）。

この信仰の三つの手段の認識は、自ずから「アポロジー」の役割を限定する。信仰が最終的には「神の賜物」である以上、人間に可能なことは、「機械を整える」（préparer la machine） ことによって「障害を除く」（ôter les obstacles）ことと、「理性によって求める」（chercher par raison）ことの二つ（L.11）であり、「アポロジー」が関わるのはこの第二の領域であることになる。

L.110には、この「アポロジー」の役割と限界とが明瞭に語られている。

> ...Et c'est pourquoi ceux à qui Dieu a donné la religion par sentiment de cœur sont bienheureux et bien légitimement persuadés, mais ceux qui ne l'ont pas nous ne pouvons la donner que par raisonnement, en attandant que Dieu la leur donne par sentiment de cœur, sans quoi la foi n'est qu'humaine et inutile pour le salut.

推論（raisonnement）による信仰は、心情の直観（sentiment de cœur）を通して神から与えられる真の信仰を欠く限り「救いには無益」である。しかし「心情を律することは我々の能力にはない」（L.100）以上、アポロジストの務めは推論の段階に限定されざるをえないことになる。

以上見てきたところを整理すれば、(1)「アポロジー」の論証は理性の場に於て、理性による推論に基づいて行なわれる。(2)真の信仰は神が心情に直観させるものであるから、アポロジストの役割はこの面に於ては予め断念されている。(3)宗教の真理性を推論によって説得された者は、自動機械の習慣化を通して確信を固め、神からの霊感を待たねばならない。

「アポロジー」を専ら理性に訴える論証の書とする考えは、こうしてパスカル自身の述べるところとも合致した整合的なものであり、異論の余地はないようにみえる。

しかしながら上の整理箇条の(1)と(2)とが単純に固定されることによって、「アポロジー」の論証領域に「心情」はいささかも関与しないと主張されるならば、筆者は若干疑問を覚えざるをえない。パスカルの「アポロジー」はいま少し複雑な、dynamique な構造をもっているように思われる。以下で我々は「アポロジー」に於ける「心情」の参与という側面を検討してみたい。

II

宗教の問題は、人間の救いと滅びとに関わる。「アポロジー」の目的が一定の真理の論証にあるとしても、扱われる「真理」のこのような性質は、当然この書に科学的真理の論証などとは異質な様相を与えずにはいない。真理の認識が人間の運命に関わるというところに、「アポロジー」が単に冷静な理性的探究の場に終らず、「心情」の介入を必要とする理由がある。それはまず「求める」ことの要請として現われる。本節ではこの点を検討したい。

前節でもとりあげた「アポロジー」第1章 *Ordre* の断章中には、「求めることを促す」といった表現が何度か繰り返されている。例えば L.4 には《Lettre pour porter à *rechercher* Dieu.》とあり、L.5 には《Une lettre d'exhortation à un ami pour le porter à *chercher.*》とあり、そして L.11 には

> Ordre. Après la lettre qu'on doit *chercher* Dieu, faire la lettre d'ôter les obstacles qui est le discours de la Machine, de préparer la Machine, de *chercher par raison*.

とある。また第12章 *Commencement* でも、実存的不安の喚起を通して、求めることの必要性が強調されている。これら二つの章が、「アポロジー」の第一部と第二部のそれぞれ初めに位置することにも注意したい。

L.11 の《chercher par raison》については前節で触れたが、いま上に見た《chercher》あるいは《rechercher》という語は、みなこの

《chercher par raison》の意味であろうか。筆者にはそこに微妙に交錯する二つの段階が区別できるように思う。「アポロジー」によって「証拠」を提示するとしても、まずその「アポロジー」を繙く気をおこさせねばなるまい。「証拠」自体は理性によって確かめうるものであるとしても、それに先立って、あるいは並行して、人生の大事たる宗教の問題をたずね求めるという基本的な姿勢が必要であろう。L.160 の三種類の人間の区別、即ち《les uns qui servent Dieu l'ayant trouvé, les autres qui s'emploient à le *chercher* ne l'ayant pas trouvé, les autres qui vivent sans le *chercher* ni l'avoir trouvé》に於ける《chercher》や、L.405 の《chercher en gémissant》などは、むしろこの基本的な姿勢としての《chercher》に近いといえよう。

パスカルがこの《chercher》という語に深い意味合いをこめていることは、L.427 や L.428 に特に明らかである。「宗教を攻撃する前に、彼らは少なくとも、自分たちの攻撃する宗教がいかなるものであるかを知らなければならない」として、パスカルは次のように書く。

> Il faudrait, pour la combattre〔la religion〕, qu'ils criassent qu'ils ont fait tous leurs efforts pour la *chercher* partout, et, même dans ce que l'Eglise propose pour s'en instruire, mais sans aucune satisfaction. (L.427)

これらの断章には、「人間にとってかくも重要な、かくも切実な事柄について、真理を求めることに無関心で暮している人々の不正」(L.428) に対するパスカルのいらだちがよく読みとれるのである。

ところでこの理性による探究に先立って要請される探究、「我々自身に関わり、我々の全存在に関わる」(L.427) 事柄の探究を務めとするのは、パスカルの用語に於ては「心情」なのである。いまこの点を明らかにしてみる。

パスカルは、上に引いた L.427のなかで「人生の究極目的」を探究せずにいる人々を嘆いたあとで、第 7 段落に於て

Je ne dis pas ceci par zèle pieux d'une dévotion spirituelle. J'entends au contraire qu'on doit avoir ce sentiment par un principe d'intérêt humain et par un intérêt d'amour-propre. (p.246)

と書くが、この部分の下書きにあたるとみられる L.432 のなかには次のように読める。

Je ne prends point cela par bigoterie, mais par *la manière dont le cœur de l'homme est fait,* non par un zèle de dévotion et de détachement, mais par un principe purement humain et par un mouvement d'intérêt et d'amour-propre. (p.440)

即ちパスカルによれば、心情は本性上（「人間の心情のでき具合」からして）「人生の究極目的」を求めずにはいられない（たとえ自愛心にひきずられて誤まった方向に求めるとしても）ものなのである。パスカルが「アポロジー」による論証に先立って訴えるのは、この心情に向かってである。

同じく L.427 の第15段落には「疑いながら求めぬ人」について《Qui souhaiterait d'avoir pour ami un homme [de cette sorte] ? 》(p.247) とあり、Lafuma がこの部分との関連を指摘する[(1)] L.731 には《Ces gens manquent de *cœur.* On n'en ferait pas son ami.》と書かれていて、「心情」と「探究」の関係を示唆しているのである。

このように理性に先立って、心情による探究の姿勢が必要とされることに於て、「アポロジー」は単なる科学的真理の論証とは異質である。知的好奇に基づく精神の秩序に於ける探究と違って、心情の探究は人間の条件を見つめるところに発する深いおののきから生まれる。この心情はさしあたって「人間的利害の原則」、「自愛心の立場」から動くものであるとしても、これによる方向づけがなければ、理性は探究へと作動しないのである。

以上が「アポロジー」の開始時点で必要とされる心情の介入である[(2)]。次節では我々の検討を、「アポロジー」の論証過程に於ける心情の参与という側面にうつしてみたい。

III

自然の造化による神の証明といった方法が、宗教に対する軽侮の念をひきおこすだけであること(L.781) をよく知っていたパスカルは、その「アポロジー」を人間本性の認識から始めた。それは悲惨と偉大の相反という人間の不可解な怪物性を、宗教だけがよく知っており、宗教だけがその原因を説明し、しかもそれを癒すことができることを示すためである。こうして善良な人々に宗教が真実であることを願わせ、しかるのちにそれが真実であることを示す――これがパスカルの計画であった。このキリスト教の真理性の本来の論証部分が、「アポロジー」第二部にあたる。ではそこに於ける心情の役割とはいかなるものであろうか。

筆者はかつてパスカルの「三つの秩序」(trois ordres) について考察した際に、この点に触れたことがある[(3)]。「三つの秩序」は「アポロジー」全体を支える極めて重要な思想であるが、この「三つの秩序」の構造のなかで、心情の占める位置と役割には重大なものがあった。その折に明らかにした如く、「アポロジー」第二部は至るところで、理性もしくは身体に対する心情の ordre の優位という構図を踏まえつつ展開し、L.308 に於てそれが身体・精神・心情＝愛という三次元の立体的構造に収斂する。この心情は自然（人間）のうちにありながら、無限と超自然に対して開かれており、信仰の最終的根拠とされた。

理性（精神）の ordre に対する心情の ordre の優位が「アポロジー」の基本的構図であるならば、その「アポロジー」を理性にのみ訴える書であるとみなすことには、不整合な点が残らないだろうか。勿論心情が理性を越えるものであること、真の回心とは理性的認識の無限の高みに位置する心情による神の愛にあることを、「理性」に対して説得することは可能であろう。

しかしながら理性と身体に対する心情の優位という構図は、「アポロジー」第二部が提示する論証自体に関わり、それを内在的に規定しているの

ではなかったろうか。

Excellence de cette manière de prouver Dieu と題された第14章に於て、パスカルは神の形而上学的証明を排し(L.190), 我々が神を知るのはただイエス・キリストによってのみであると説く。

> ...Mais par J.-C. et en J.-C. on prouve Dieu et on enseigne la morale et la doctrine. J.-C. est donc le véritable Dieu des hommes. (L.189)

即ちキリスト教の神の証明とは、イエス・キリストの神性の立証を通してなされるのであり、この立証が「アポロジー」第二部後半(第16章以下)の主題である。

具体的な証拠の提示は第20章から始まるが、収められた断章の多さからいって最も重要なものは、第21章 *Perpétuité*, 第23章 *Preuves de Jésus-Christ*, 第24章 *Prophéties* の三章である。L.7 で「信仰は証拠と異なる」と言われた証拠がこれであり、これは理性に訴えかける証拠だと考えられる。だがそうであるなら証拠の提示に関する限りは、「アポロジー」も、パスカルが「真空論序言」のなかで「実験と推理のもとにある学問」として分類した幾何学や自然学に於ける論証も、基本的に同じ性質のものなのであろうか。

ここで我々は「明るさと暗さ」(clair-obscur) というキリスト教の根本的性格を想起しなければならない。この原理は神に於ては「隠れたる神」として、聖書に於ては「象徴」として働き、イエスのひととなりや予言の性格にも一貫して認められるものである。ではこの原理が証拠の提示をいかに規制することになるか、「イエス・キリストの最大の証拠」(L.335) だとされる予言の場合について検討を加えてみよう。

L.274 にパスカルは書いている。

> Preuves des deux testaments à la fois.
>
> Pour prouver d'un coup tous les deux il ne faut que voir si les prophéties de l'un sont accomplies en l'autre.

Pour examiner les prophéties il faut les entendre.

Car si on croit qu'elles n'ont qu'un sens il est sûr que le Messie ne sera point venu, mais si elles ont deux sens il est sûr qu'il sera venu en J.-C.

Toute la question est donc de savoir si elles ont deux sens.

これに続けてパスカルは聖書は二つの意味を持つと述べ、この「象徴」の原理自体の証拠を列挙する。従って推論の進展は，(1)「象徴」の原理の正当性の証明、(2)この原理による予言の理解、(3)予言の成就の検証という順序を辿る。これによって旧約と新約の同時証明が可能となり、結局イエスのメシア性が立証されるはずである。この手続きは一見理性の要求に適った合理的なものに見える。しかし実際には、以下に見る如く(2)の段階で非理性的要素が介入していると考えねばならない。

「象徴」が「象徴」である所以は、それが万人に等しく露わにされていない点にある。ユダヤ教徒は、予言によって告げられたメシアに肉的な偉大を期待することにより、イエスをその卑賤と死に於て見そこなった(L. 256)。彼らは「象徴」として与えられた予言を物質的にしか理解しなかったのである。ところでこの「象徴」の解読を、パスカルは理性にではなく心情に依存させていることに注意しなければならない。L.255 によれば、メシアの「来臨の時期は明瞭に予言され、来臨の仕方は象徴的に予言された」が、それはメシアを善良な人々には認めさせ、邪悪な人々には認めさせまいとする神の意志によるのであった。続いて次のように述べられている。

Car l'intelligence des biens promis dépend du *cœur,* qui appelle bien ce qu'il aime, mais l'intelligence du temps promis ne dépend point du *cœur.* Et ainsi la prédiction claire du temps et obscure des biens ne décoit que les seuls méchants.

ここに明らかな通り、「象徴」を読みとくのは、パスカルの用語に於ては心情である。より正確に言えば、「象徴」を正しく読みとくか否かは心情

のあり方いかん（disposition du cœur）に関わる。二種類の人々、二種類の心情があり、一方は幸福を物質的に、他方は霊的に解することによって全く逆の方向へ進む。

L.503 はこの「象徴」と心情のあいだの関係を同じく明瞭に語っている。

> Dans ces promesses là chacun trouve ce qu'il a dans le fond de son *cœur,* les biens temporels ou les biens spirituels, Dieu ou les créatures.

では何が心情をこのような対極的な二方向へ分かつのかといえば、L. 502 がそれを示してくれる。

> ...quand les biens sont promis en abondance, qui les empêchait d'entendre les véritables biens, sinon leur cupidité qui déterminait ce sens aux biens de la terre. Mais ceux qui n'avaient de bien qu'en Dieu, les rapportaient uniquement à Dieu.
>
> Car il y a deux principes qui partagent les volontés(4) des hommes, la cupidité et la charité.

即ち愛（charité）に占められている時、心情は「象徴」のヴェールを突きぬけて真理を捕えることが可能となり、逆に邪欲（cupidité あるいは concupiscence）が心情に根をおろす時、ひとは地上的・肉的幸福に執着して誤まるのである。(5)

従って先に見た論証手続きのうち、「象徴」の原理による予言の理解という第二段階には、この直き心情の参与が決定的に必要であり、これなくしては「アポロジー」の提示する証拠は証拠たりえないのである。

心情の参与によって証拠が証拠たりうるとは、理性の statique な探究によるのでなく、全身全霊をあげて求める時には、証拠が明らかに見えてくることを意味する。そもそもキリスト教の「明るさと暗さ」の原理とは、「求める者」、「ひたすら見ようと願う者」にとっては充分な光があるということに他ならなかった。

> ...il〔Dieu〕a donné des marques de soi visibles à ceux qui

le cherchent et non à ceux qui ne le cherchent pas.

Il y a assez de lumière pour ceux qui ne désirent que de voir, et assez d'obscurité pour ceux qui ont une disposition contraire. (L.149 末尾)

我々が「象徴」の解読の問題以来辿ってきた文脈による以上、ここで「求める」といわれているのが、「理性によって求める」意ではなく、心情によって求めることであるのは言うまでもなかろう。事実この引用文のすぐ前には、次のように書かれている。

...et ainsi voulant paraître à découvert à ceux qui le cherchent de tout leur *cœur,* et caché à ceux qui le fuient de tout leur *cœur* il a tempéré sa connaissance...

同様の表現は L.269 (ceux qui cherchent Dieu de tout leur *cœur*) や、L.427 の初め (ceux qui le cherchent de tout leur *cœur*) にも見出せる。

勿論《de tout son cœur》というのは一般に慣用句であって、そこに心情の役割を読みとるのは行きすぎであるかもしれない[(6)]。しかしパスカルにあっては、この表現が常に神もしくは真理の探究ないし愛と結びつけて使われていることは無視できない[(7)]。またこの点に関して、アルノーが神の愛 (amour de Dieu) に触れて書いている一節を引いておきたい。アルノーは神の言葉として《Vous l'aimerez [Dieu] de *tout votre cœur.*》と記したあとで、その意味を説明して次のように述べるのである。

... vous l'aimerez, dis-je, non avec un cœur divisé et partagé par différentes affections, mais de tout votre cœur. Car Dieu veut tellement posséder tout le cœur de l'homme, qu'il n'y peut souffrir aucun partage[(8)]

ここでは《de tout votre cœur》は単なる慣用表現ではなく、「汝の心のすべてをもって」という強い意味であることは明白である。パスカルの《chercher de tout leur cœur》,《aimer de tout leur cœur》も同じ

ように読むことはできないだろうか。《Mon cœur tend tout entier à connaître où est le vrai bien, pour le suivre.》(L.429) という一文も、筆者の考えに根拠を与えてくれよう。

心を尽して (de tout son cœur) 求められる時、宗教の真理は明らかに見えてくる。真理の把握がこのように単なる理性ではなく、まずもって心情のありように依存するが故に、「宗教は確実ではない」(L.577) と言われ、また《Les prophéties, les miracles mêmes et les preuves de notre religion ne sont pas de telle nature qu'on puisse dire qu'ils sont absolument convaincants ...》(L.835) とも言われるのである。

さて我々は「アポロジー」の論証過程に於ける心情の参与を、主に「予言」の証拠について見てきたが、最後に第23章 *Preuves de Jésus-Christ* についても同じ事情を指摘しておこう。メシアの予言と同様、イエスのひととなりも或る暗さのなかにある。ユダヤ人や歴史家は彼を認めなかった。しかし L.308 ではっきりと語られるように、この暗さも心情＝愛の ordre に於ては輝かしい荘麗さに変わる。

> O qu'il est venu en grande pompe et en une prodigieuse magnificence aux yeux du *cœur* et qui voyent la sagesse.

これに対し身体の秩序，精神の秩序にある人々は、この輝きに盲目である。イエスの偉大が精神の秩序（それは理性が力を行使する場である）に於て認めえぬものであるならば、この偉大さをもって「証拠」の重要な要素となす「アポロジー」が、理性的推論にのみ訴える論証の書だとすることには、やはり不合理が生じるであろう。ここでも「アポロジー」の論証過程に，心情の参与を認めないわけにはいかないのである。

「理性」に訴える「アポロジー」。しかしこの「理性」は、「心情」によって深く動機づけられ、導かれることによって初めて充全に機能しうるのである。

Ⅳ

「アポロジー」は理性的推論によるキリスト教の真理性の立証を企図するものであるとしても、そこには心情の参与が決定的に必要であった。ところでこの人間の心情は、堕罪以後邪欲の支配下にあり、「虚ろで汚物に満ち」(L.139), 邪悪(malignité) の刻印を受け(L.278), 偽装・虚偽・偽善が根ざすところ(L.978) となっている。この時心情は自己と被造物のみを愛して、神から無限に離れている[9]。しかしまた心情は神が働きかける特権的な場でもある。恩寵に導かれて回心を経ることにより、心情は逆に信仰の最終的な拠り所となる。神を求め、神を愛するのは心情であり、信仰とは神がこの心情を傾ける(L.380, L.382 など)ことの他にはない。この故に「アポロジー」の役割に初めから明確な限界のあることは、第Ⅰ節で述べた通りである。

しかしこのような心情のあり方は、これまでの検討に新たな問題を投げかける。我々の見てきたように、「アポロジー」の提示する証拠自体が、直き心情の参与なしには証拠たりえず、しかも心情を正しくあらしめるのが神の業[10]であるならば、それは初めから不信仰者に対して閉ざされていることになり、「アポロジー」の成立根拠は崩壊することになりかねないであろう。このアポリアを回避するには、再び「アポロジー」の論証を純粋に理性的推論の領域に閉じこめ、心情の役割を排除するしかないであろうが、この解釈は我々の立場と相容れない。

むしろこのアポリアは、「アポロジー」の、つまりはパスカル的信仰の特質に深く根ざしたものと考えるべきではなかろうか。

パスカルは「恩寵文書」に於て、神の意志と人間の意志の協働について考察を残している。神学的見地からすれば、無論神の意志が主導的・支配的である。人が神を愛するのは、神が人をして自らを愛せしめるからであり、人が神を去るのは、神が人を去るからである。しかしながら神の意志は人間には「計りしれない秘密」であり、すべての人間は自分が選ばれた

者に属していると信じ、誰しも自分の救いに役立つことをせずにはいられない（「第一文書」[11]）。この限りに於て、人間の側からすれば、人が神を去る時にこそ神が人を去るのだと言いうるであろう。神が先か人が先かという果てしのない循環を断ち切るのは、ただ人間の実践だけであり、原理的・公式的にみれば人間的営為が究極的に無益だとしても、人間はにも拘ず努めねばならないはずである。そこにパスカルが「求める」ことの必要性を力を尽して説く理由があり、しかもこのように「呻きつつ求める」者に対しては、やがて《Tu ne me chercherais pas si tu ne m'avais trouvé.》(L.919) という誠に意味深い言葉が与えられるのである。心情＝愛の秩序に於ける神と人との向かい合いの構造は、結局このような形でしかありえない。

「アポロジー」についても同じことが言いうるであろう。パスカルの「アポロジー」は、その「論証」の果てに、結局はこの心情＝愛の秩序に立つことの要請であり、そうであるからこそ，その「理性的」論証さえもが心情の参与なしには発動しえない構造になっている。それまでに心情の参与があって初めて、第27章 *Conclusion*の最終的表現《Qu'il y a loin de la connaissance de Dieu à l'aimer.》(L.377) という一文に於ける断絶の認識が却って飛躍への促しとなるのであり、パスカルの「アポロジー」はそのような dynamique な緊張に満ちた構造を備えているのである。

こうしていわば「アポロジー」自体が、求める者に対してのみ開かれている。そして求めることを始めた人間は既に心情の秩序に足を踏み入れているのであり、Chevalier の表現を借用するなら「その瞬間に、勝負は人間的には殆ど決まったも同然[12]」なのである。我々が先に遭遇したアポリアとは、「アポロジー」の要請する心情の秩序に立つことの終にかなわぬ者にとってのみ、アポリアであり続けるといえよう。

注

「パンセ」の引用は Lafuma 版 (*Pensées,* Editions du Luxembourg,

1952) 第一巻に依り、断章番号を L. で示した。長い断章の場合など、頁数を指示したこともある。

(1) *Pensées*, t.II *Notes*, p.135

(2) 「アポロジー」の初めと終わりに於ける心情の介入については、Laporte, *Le cœur et la raison selon Pascal*, Elzévir, 1950, p.158 参照。筆者は次節で述べる如く、これに加えて本来の論証部分へも、心情の介入を認めうると考える。

(3) 拙稿「パスカルの『三つの秩序』」(大阪大学フランス語フランス文学会, *GALLIA*, 第14号)

(4) 引用文では「心情」ではなく「意志」となっている。しかしパスカルに於ては、cœur と volonté とが極めて近い意味で使われることがある。詳論の余裕はないが、例えば L.423 と L.661, あるいは次にあげる L.427の一節とその下書きにあたる L.432 の一節とを比較されたい。

Rien n'accuse davantage une extrême faiblesse d'esprit que de ne pas connaître quel est le malheur d'un homme sans Dieu; rien ne marque davantage une *mauvaise disposition du cœur* que de ne pas souhaiter la vérité des promesses éternelles. (p.249)

N'en être pas fâché et ne pas aimer cela accuse tant de faiblesse d'esprit et tant de *malice dans la volonté*. (p.441)

両者の関係について、《la volonté, faculté des choix particuliers, se distingue du cœur, qui lui donne ses orientations générales》とする Harrington の指摘 (*Vérité et méthode dans les Pensées de Pascal*, Vrin, 1972, p.91) は同意しうるものである。

(5) 前掲拙稿でも触れたが、心情のこの二つの可能性のうち、恩寵に導かれて「象徴」を読みとく立場に対して「心情」の名を残すならば、邪欲に支配されて肉的誤謬に陥る他方の立場は、「身体」(corps または chair) と呼

ぶのが適当である。パスカル自身 L.270 などで心情をこの言葉に対比させて用いている。

(6) Harrington はこれを単なる慣用句とし、《très sincèrement》の意味と考えることですましている (*Op.cit.*,p.117)。

(7) 例えば L.149:《Votre devoir est à l'aimer [Dieu] de tout votre cœur.》(消去された部分), L.150:《si vous désirez de tout votre cœur de la connaître [la vérité]》, L.453:《Deut. 30. 6. Dieu te circoncira le cœur et à tes enfants afin que tu l'aimes de tout ton cœur.》, L.881:《ceux qui aiment Dieu de tout leur cœur》.

(8) *Dissertation théologique sur le commandement d'aimer Dieu. Œuvres de Messire Antoine Arnauld,* Lausanne, t. XXIX, 1779, p.28. この著作 (1657) は *Extrait de quelques erreurs et impiétez* (1641) 同様、イエズス会のアントワース・シルモン神父の*Défense de la Vertu* (1641) を批判するために書かれた。神の愛(amour de Dieu)には心情あるいは意志による内的な affection の必須なる旨が説かれている。この著作はニコルの「プロヴァンシアル」ラテン語版「第10書簡」の注として収められた。

(9) 《...tous les mouvements naturels de mon cœur, se portant vers les créatures ou vers moi-même, ne peuvent que vous irriter.》 (*Prière pour demander à Dieu le bon usage des maladies,* Pascal, *Opuscules et lettres,* Aubier, 1955, p.157)

(10) 心情の回心が人間の力を越えるものであることは、例えば次の箇所に見える。《Mais, mon Dieu, comme la conversion de mon cœur, que je vous demande, est un ouvrage qui passe tous les efforts de la nature...》 (*Ibid.,* p.155)

(11) *Œuvres complètes,* Seuil, 1963, p.331.

(12) Chevalier, *Pascal,* Plon, 1949, p.271.

付記. Chevalier, Laporte, Harrington の前掲三著から学ぶところがあった。

(大学院学生)